

毎月お送りしている情報は1986年から隔月で始まり、
1990年からは毎月お送りするようになり今回で 246回目となりました。

『意識と知識』・『意識と知識・Ⅱ』・『知識は力』・『何を信じていいかわからない』
『懐疑心』・『科学・哲学と健康管理』・『科学と健康管理』・『科学とは』
『21世紀』・『学習とコレステロール』・『哲学のなぐさめ』・『遺伝子の時代』
『科学書と哲学書』などは1993年からの
『新年号のタイトル』です（内容はホームページで御覧になれます）

この数年は、新年にあたり初心を忘れないとの気持ちで
下記の文章を繰り返し記載させていただいています。

.....

科学をする人は、「なぜ」「どうして」と考えている。
…人間は「なぜ」と思ってもすぐに忘れちゃう。
あるいは、適当な説明を聞いて納得しちゃう。
これじゃだめで、自分の頭にずーっと持っておくのが大事だと思います。

常識は大事なんだけど、邪魔するものなんです。
不思議だなと思ったことは、ちゃんとした答が出るまでその質問を
ずっと忘れないで下さい。その答が出ると、ものすごく嬉しい。

科学の一番の良いところは、いったんその味を覚えたら忘れないということです。
答が分かった時の面白さ、それが発見であるわけです。

科学は自分が納得するかしらないかであって、誰だってできる。
発見は回りの人が大事に思うかどうかではなく、自分にとって大事なら嬉しいんです。

… 養老孟司氏の講演から

.....

サイエンスとはもともと何かと言えば、ラテン語のscientiaで知識そのものを意味している
scientiaは、scio（知る）の名詞形であり、
サイエンスとは、本来、知ること全体、知識の総体を指しているのである。

…科学というものは、本来おもしろいものである。
分かれば、こんな面白いものはない。何がどうなっているかを知りたいというのは、
人間が生まれながらに持っている、どうしようもない本性であって、
その本性につき動かされて出来上がったのが、科学という知の全体像なのだから、
これが面白くなかろうはずはないのである。

もちろん分からなければ面白くないし、分からないものを分からなくても良いから
とにかく覚えろというようなプレッシャーをかけられたら（一貫してそれをやってきたのが
日本の科学教育ならぬ理科教育だった）面白かろうはずがない。

私は、グイットツタインの「語りうるものはすべて明晰に語りうる」という言葉の信奉者で
自分の特性は、難しいことを分かりやすく語ることにありと思って、
この仕事を続けてきた。

… 立花隆氏の著書から

.....

『100年たっても腐らない情報は科学的なもの』
『身体の問題、健康の問題はごまかしがきかない。それは科学の問題だからである』
ということを恩師・三石巖先生に教えていただきました。

今年も科学的な健康情報をお伝えしたいと考えています。